

立原正秋全集

第二卷

立原正秋全集

第二卷

角川書店

立原正秋全集 第二卷

昭和五十七年十一月十二日初版発行
昭和五十七年十二月二十五日再版発行

著 者 立原正秋

発行者 角川春樹

印刷所 新興印刷株式会社

製本所 株式会社鈴木製本所

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―十三―三

電話東京二六五―七一一（大代表）

振替東京三一―九五二〇八 二一〇二

Printed in Japan 0393-573402-0946(0)



落丁・風丁本はお取替えいたします

立原正秋全集 第二卷 目次

美しい村

五

薪能

七

剣ヶ崎

八

海と三つの短篇

一〇

赤煉瓦の家

一七

嫉妬

二三

四月の雨

二七

波

二七

手

三一

掌の小説

三五

光と風

四一

漆の花

三九

解題

武田勝彦
四一

美しい村

— 小川国夫に

一

有料道路料金徴収所からは富士山がみえた。

彼は煙草をかいに山をおりと、たいがいこの料金徴収所により、料金徴収人としてしばらく立話をする。徴収人は陽灼けた六十がらみの男で、バス会社の制服制帽をつけた一刻そうな老人である。終日、徴収所のなかで煉炭火鉢の上に両足をのせ股をあぶりながら、抹茶をすすり安煙草をのんでいた。

今日は富士がみえないね、と彼が話かけると、さよう、今日は箱根に雲がかかっているんだ、と徴収人は答える。彼は久しいこと街にはでなかった。でる用もなかったし、でる気持もなかった。たまにでも、むかしのように知人や友人とあつてコーヒー店で時間をつぶすこともしなくなった。彼の日課は、煙草をかいに近くの村におりることだけとなり、もし彼が数日も山をおらないつもりなら、いちどに煙草を十もかっておけばよかったが、しかし彼はまいにち山をおりて煙草をかいにでかけた。歩行距離にして三キロメートルほどで、それだけ歩けばからだのためによいから、などということではなかった。数年前の彼は一日に現在の十倍は歩いていたのである。

十月にはいつてからまもなく、彼はストーブに焚く灯油を注文しに村のガソリンスタンドにでかけた。ストーブというのは祖父の代から使っているアメリカ製のもので、彼はこのストーブに妙な愛着を感じていた。祖

父が亡くなるとき、形見になにが欲しいか、ときかれ、十一歳の彼はストーブと答えた。ほかにも彼の父が買ったスエーデン製と彼の妻が買ったイギリス製のものがあったが、彼は自分の居間で祖父の形見を愛用していた。祖父は彼にストーブといっしょにブライアのパイプを九本のこしていった。おまえは、わしがパイプをみがいていたときにいつも手伝ってくれたから、二十歳になったら使うように、と彼の祖父は言いのこした。彼が二十歳になって煙草をのみだしたとき、おまえはおじいさんそっくりだ、と彼の父は言った。冬の夜のストーブの前でパイプをくゆらしている彼の姿が祖父そっくりだと言ったのである。こんなわけで、彼は家のまわりの樹木から秋の葉が落ちはじめると、戸棚からストーブをもちだすのである。そのストーブは彼の生活の一部分となっていた。

有料道路をおりと陸橋があり、陸橋の下は県道が東西にぬけている。有料道路をおりきったところが料金徴収所で、遮断機の向うの橋の手すりでは、小学生が数人、小川に釣糸をたれていた。そこでは小鮒がつれた。彼が陸橋を渡りきったとき、橋むこうの国鉄の工場で終業のサイレンがなりはじめた。

「もう、けえりな。風邪ひくぞ」

と徴収人が橋の上の子供達に声をかけていた。

「だって今日は一びきもつれねえや」

子供のひとりがふりむいて答えている。

「魚もおまんまたべにけえただよ。早くけえりな。また明日くるんだ」

徴収人が怒ったように応じかえしている。

このとき乗合バスがきた。徴収人がいそぎ遮断機をあげる。彼は徴収人に会釈し、ガソリンスタンドにむかった。ガソリンスタンド前の県道は車の往来がはげしく、よく事故がおきた。

彼が灯油を届けてくれとたのんでスタンドの事務所でおやじと話していたとき、有料道路のちかくに棲んでいる建築技師の若い奥さんがはいってきた。奥さんは炊事用の灯油を注文し、女事務員と寒くなったことなどを笑顔で話し、それから事務所をでると、通りのむこうがわに渡ろうとした。奥さんは左手に買物籠をさげ、左右を見まわしてたち

どまった。彼女の動作から、ああ、車がきたな、と彼は思った。

彼が表をみると、トラックは道路の右方から走ってきた。この道路は陸橋の下からこちらにむかつて彎曲していた。トラックはあきらかに制限速度を超えた速さで走ってきた。彼が、危い！と感じたときはおそかった。奥さんの悲鳴とともに買物籠が宙にとび、トラックはスタンドに衝突して積んでいた砂利をこぼし、隣の建材店に突入していた。

「またやりやがった！」

スタンドのおやじが席をたち、荒らされた表をみながら交番に電話した。

奥さんは倒れたスタンドのわきに血にそまって横たわっていた。スタンドは手廻しの旧式のもので、こぼれたガソリンが奥さんの方にむかつて流れていた。彼のそばの女事務員が目を伏せた。彼は、乱れた緋色の裾からみえる奥さんの白い脚をみつめ、その奥さんには近くの小学校に通っている女の子がいること、いまさっき奥さんが今夜の炊事につかうから灯油を早く届けてほしい、と言ったことをおもいかえし、なんだってむこうがわへ渡ろうとしたのだろうと考えた。むこうがわには石焼芋屋のほかに店はなく、奥さんは家へ帰るのに有料道路を登ればよいはずだった。建材店のそばで半年前に開業したばかりの医者が現場にきたが、奥さんは頭を打たれて即死していた。トラックの運転手は車からでてくると、自分が荒らした光景をひとわたり眺め終ってから言った。

「この道はカーブが悪い」

若い男だった。

なるほど、カーブが悪いか、と彼は若い運転手の粗野な顔をみながらスタンドの事務所からでた。屍体は頭が破れ、コンクリートに脳漿が流れでていた。

彼はそれから煙草をかい、有料道路を登って自宅に戻りながら、あのトラックにはねられた女が自分の妻であったら……と考えた。

落葉しはじめた雑木林のなかの一軒家が彼の家である。両となりの家までは二百メートルから五百メートルの距離があり、この辺一帯がそんな地勢で、家と家をつなぐ道は雑木林のなかの小道である。

彼の家はバス道路から近く、門まで広い道がつけられていた。その家は、彼の祖父が明治の中期に造った家で、いま彼の前で十月の余光に照らしだされた全容は廃屋に近かった。造りは堅牢で、まだ百年は保つ家だったが、しかしみる人に廃屋の感じで印象された。

彼は庭にはいったとき、玄関からでてきたピアノ教師とあった。教師は季節の移り変りをかんとんに語ってあいさつしたが、彼は目礼して教師と行きすぎた。彼はこの教師を、十二歳になる彼の娘のピアノの先生としてよりも、彼の妻の来客としてよくおぼえていた。彼は線のほそいその教師をきらいだというわけではなかったが、くちをきかなかった。一日にいちどは来客があり、ときには五、六人もそろって訪ねてくるが、それらの男客はみな妻の来客で、彼はそれらの人達とは接触がなかった。ほかに画家や大学生、小説家、私立大学の助教授、それから、なにをやっているのかわからない男が二人いた。そして、それらの人達はすべて彼より若かった。

日曜日がくると彼の妻は娘をつれて麓のカトリック教会にでかける。教会の帰りにたいがい出入している男客を幾人かつれてきて昼食をふるまう。ときには教会の外人神父も訪ねてきた。年若い神父はスコラ哲学の權威だということだったが、彼はこの神父とも接触しなかった。彼には、日本における外人宣教師の位置、役割がどんなものかわからなかった。わからないというより、彼等の存在が疑問だった。カトリックにかぎらずキリスト教の教会の日本における役割が彼には疑問だった。これらの疑問は、教会と日本の信者のあいだには埋めることのできない割れ目がある横たわっているのではないか、外人の宣教師達には割れ目がみえるが、しかし日本の信者には割れ目はみえない、そして東洋人がヨーロッパ人と同じようにキリスト教徒になれることはあり得ないのではないか、ヨーロッパ人にとってキリスト教はひとつの理性であるが、しかし東洋人がそのようになれるだろうか、と彼が考え続けてきたことと関連していた。

大戦が終ったとき彼は三十歳になっていた。仲間には、身をもって戦争に協力したものの、ささやかながら戦争に批判的であったもの達がいた。戦争に協力したもののなかには敗戦をひとつの挫折として受けとめ、そのなかで生涯を終えようと決めたものもいた。批判的であったもののなかにはその一事をほこりとしているものもいた。このように

双方ともにそれぞれの名誉を守っていたが、彼には守るべき名誉がなかった。

こんなときに彼はごくありふれた見合をして結婚したが、とりたてた感興はわかかなかった。ただ、俺はこの女を愛して行けるだろうと思った。五年たつて残された母が亡くなったとき、彼には雑木林とそのなかの家、それからいくばくかの動産がのこされた。彼はよぶんなものを売りはらい、金を信託銀行にあずけた。気がついてみたら、毎年雑木林の落葉をみつめてくらしてきた年月だけがおもいかえされ、彼は四十になっていた。それから季節の移り変わりはやかた。四十から四十五までの年月が実にはやく過ぎ去つたのである。彼はそのはやかた年月を、電気メーター計の回転目盛のはやさに似ていると思つた。四十五歳の彼は、もう何事にも興味を見出せないディレッタントだつた。妻とのあいだに子供は娘ひとりしかできなく、したがって彼の妻は暇がありすぎた。彼の妻は、結婚したとき、彼がなにかになるものと思ひこんでいたらしかつた。彼はなにもものにもならなかつたので、彼女はときどき夫の前で自分の思いちがいを嘆いた。彼はそんな妻をだまつてみつめていた。

妻に男友達ができしたのは三年前からで、それらの男友達がすべて妻のいうなにかになる才能をそなえたものか、あるいはなにかになりかけた人達であつただけに、彼は妻の日常をだまつて見守るよりほかなかつた。彼女はよく彼の知人や彼女の知人のなから、なにかのものになつた人達の名をあげた。なにもものにもならなかつた男はそんな妻に沈黙をもつて答えた。彼にみえるのは季節の移り変わりだけだつた。

二階の二間が彼の居間で、一間は寝室、一間は書斎である。二間ともだだっぴろい洋間で、窓からは雑木林と付近の家がみえる。

階下の妻の寝室に出入しなくなつたのは三年前からで、彼はときどきこの三年間を寂寞感をともなつておもいかえず。眠れない夜を階下からきこえてくる遠い潮騒に似た妻の客達の話声に耳をすましたこともある。彼等の席にはいりたいた気持はなく、あのように生きていて面白いのか、と考へた。ときには夜おそく帰宅した妻が門の前で車からおり寝室にはいるまでの動きを、手にとるように感じたこともある。

彼の娘はときどき彼のところにあがってきた。父さまのところはきびしいのね、と彼女は室内をながめまわし、それから学校でおきたことを二つ三つ語り、ではさよなら、またくるわね、と言いのこしておりて行く。娘のはなしはたいがいいたわいもないもので、新しくきた教師にみんながどんな仇名あだなをつけたとか、どの女教師は近いうちに結婚するが、結婚相手が風采のあがらない男であるとか、に類したものだ。彼はそんなことを語る娘を暖かい目でながめ、この娘のためにもいますこし生きていなければ、と考える。そして、いますこし生きていなければ、と考えた自分にはつとすることがある。

彼は、自分がうまれ育った村を美しい村だと思っていた。若いときには、美しい村を歩きながら自然という対象に同化することをきらい、現実を対象化し限定してながめていたが、四十をこしてからは考えていることと目が混同してしまい、ときによると対象に同化した自分を見出すことがあった。そんなとき彼はわけもなくあわてた。そのあわてかたには得体の知れない敗北感がともなった。妻の言うなにかになることは簡単だったから、敗北感はそのこからきたものではなかった。それは目の敗北といってもよかった。しかし彼は、俺にはまだ観察するだけの余裕がすこしはのこされているから、とその敗北を認めようとはしなかった。

日毎に雑木林の木の枝から葉が剥はがれて行き、美しい樹肌がみえるようになった。林道を歩いている女の足袋の白さが冴え、村は秋から冬への相貌をみせはじめた。

麓の教会の主催でバザーをやる、ということをや彼は娘からきいた。主催は教会だが、会場は彼の家の階下の広間がえらばれていた。出品はすべて無料で、売上金はカトリック教団経営の孤児院に寄付することだった。

こんな山のなかの会場へ誰が品物をかいくるのか、と彼が考えていたら、日曜日の朝十時頃、彼が二階からみおろしていると、ぞくぞく人がつめかけていた。弥撒ミサの帰りの人が多かった。村の人達がこれほど暇をもてあましていることは彼をはじめて知った。

彼はひるすずに二階からおりて会場をのぞいてみた。彼の妻の出品は、レース編みのテーブルかけと手編みの女も

ののスイーター、それに、これはどうも買ったとしか思われない男ものの模様編みのスキー靴下が並べてあった。テールかけには五千円という値段がつけてあり、高いので売れないらしかった。

「如何です、このわれわれの催しは」

会場に控えていた助教授が彼を認めるとよってきて言った。

「けっこうですね」

彼は助教授の方はみずに催しものの品をながめ渡しながら答えた。

「そりゃ、なんですか、皮肉ですか」

「いや、とんでもない」

「みんなまじめなんですよ。暇と金がある連中がやる仕事だとしても、意図のまじめさは認めなければなりませんよ」

「どうしてまたここを会場にえらんだのですか？」

「それが、奥さんの御希望でして、教会だと、信者でない人があまり入ってこないのですよ。ここなら、一般の人も入ってくるだろうということになりましたね」

「なるほど。で、いくらか売れましたか？」

「八千円ばかりですが」

「去年はどうでした？」

「去年は一万円売りました」

それから助教授は、助教授の先輩であり、彼には友人にあたる大学教授の近況を語った。彼はこの友人から二か月ほど前に、ヨーロッパから帰ってきた、との便りを受けとっていたが、もう十年はあつていなかった。むかしの仲間のうち、あるものは名声を得ており、あるものは尾羽打ち枯らしており、そして幾人かはこの世にいなかった。移ろうありさまを彼はいままで山からながめてきただけだった。

「あの奥さん達はいつみても年より若いな」

助教授は会場にあらわれた三人づれの中年女をさして言った。彼は助教授のゆびさした方をちらとみたり、陳列品に視線を戻すと、この男の専攻はなんだったけな、と考えた。どうもそれはおもいだせなかった。

このとき出入口の戸があき、神父がはいってきた。神父はまっさきにこの家の主人である彼の前にくると握手を求めた。

「しばらくお目にかかりませんが、おかわりございませんか」

神父は達者な日本語ではなしかけた。

彼は、神父と話すのがはじめてというわけではなかったが、やはりなにか妙な感じがした。これは、この年老いた外国人がこの場にそぐわない、ということではなく、日本人のあいだにおけるこの人の位置、役割が俺にはわからない、ということだが、と彼は考えながら握手の求めに応じた。

会場にいた人々は間もなく神父を中心にして話しはじめたので、彼はそこをでた。

それから二階の自分の居間に戻り、ストーブをつけてその前に坐ってみたが、なにもすることがなかった。階下にあつまっている人々も彼にはわからなかった。彼等は善良なカトリック教徒で、無知な狂信者ではなかった。すこしばかり選民意識があつたにしろ、彼等は単純で善良な人々だった。しかし彼等の存在が彼にはわからなかった。どのつまり、あんな日常が面白いのか、と彼は考える。

彼はストーブを消し、家をでた。

村には、二本のバス道路とは別に山から麓に通じているいくつかの林道がある。彼はこれらの林道を殆んど歩きつくしていた。なかでも一本の林道、料金徴収所のある方とは反対の方角にある海岸の遊歩道路に通じている林道を、彼は三年間歩き続けた。松林をおりて行くと、やがて潮騒がきこえ、いましばらく歩くと、はつきり海の音がしてくる。遊歩道路からすこしひっこんだところに建っているレストハウスの青い屋根は林道の途中からみえる。海は風いでいたが、うすぐもりの空の下で寒々とひろがっていた。